西ドイツにみる体育理論とスポーツ教育学の関係

岡 出 美 則 (愛知教育大学)

— Relationship between theory of physical education
and sport pedagogy in West Germany —

Yoshinori OKADA

Aichi University of Education
Igaya-Chyo Kariya-Shi Aichi (448)

Abstract

Scince the beginning in 1970's, we can easily find out many opinions, which intend to make up new directions in physical education. We can show the opinions of sport education as one of such. But what should be done to obtain good results under these opinios? Maybe, one way to solve this question is to establish the science of physical education. And the history of sport pedagogy (Sportpädagogik) in West Germany gives us full of helpful suggestions to construct the science of physical education.

In modern understanding in West Germany, sport pedagogy is considered as such science, which developed on the base of theory of physical education. So, in this study, I try to make clear mainly the next problems ;

- 1 . When changed the technical term from theory of physical education (Theorie der Leibeserziehung) to sport pedagogy (Sportpädagogik) in West Germany?
- 2 . What means this change of technical term from theory of physical education to sport pedagogy? Why changed technical term in West Germany?
- 3 . What are the problems in sport pedagogy of the period?

In this study I get the conclusions as such;

- 1 . Instead of the technical term "theory of physical education", the term "sport pedagogy" began to be used in this field from 1969 to 1973.
- 2 . We can recognize a difference between theory of physical education and sport pedagogy from two aspects ; one is the change of interest in this field, and another is the change of methods. Interest and methods are to be much more various after adopting the term sport pedagogy.
- 3 . Sport pedagogy of the period has many problems. These are, for example, as follows ; Methodology problems. Relationship to its neighbour sciences. Systematizing problem of sport pedagogy as science. Construction problem of sport pedagogy as action science. Understanding problem of relationship between theory and praxis.

序

「楽しい体育」ということばのもとに体育科教育の新たな方向が求められて久しい。しかし、それを単なるスローガンに終わらせることなく、より実り豊かなものにしていくためには何が求められるのであろうか。その一例としては、実践の成果をだれもが共有していけるようにする作業、実践をみつめる巾広い視点を与えていく作業を挙げることができよう。そして、その意味では、体育科教育に関する学問の確立が求められる。しかし、そのような学問を構築していく際にはどのような手続きが必要となるのか。西ドイツにおけるスポーツ教育学の動向は、この問題を考えていく際に一定の示唆を与えてくれる。

現在、西ドイツでは、スポーツと教育の関連を取り扱う科学、人間の発達を促し生活を豊かにしていくスポーツ教育の実践に求められる理論的根拠を与える学問としてスポーツ教育学が理解されている。すなわち、スポーツ教育学は、(1)スポーツ実践が発達及び生活形成にもたらす効果、(2)スポーツ実践の諸形態がそれらに対してもつ有効性、(3)スポーツ実践構築に際して求められる配慮、(4)スポーツ実践を規定する諸条件の意味、といった問題領域に関わる学問とされている(Röthig,³⁹ pp.351)。しかし、「体育理論」(Theorie der Leibeserziehung)に代わり「スポーツ教育学」(Sportpädagogik)という名辞が専門術語として研究者間に定着していくのは1960年代末以降である。そこで本小論では、西ドイツにおいて「体育理論」と対比的に用いられる「スポーツ教育学」に目を向け、その専門術語としての定着時期、研究の関心及び方法、さらにはそれが現在抱えている問題点に目を向け、体育理論とスポーツ教育学の関係を明らかにすることを試みる。

本 論

現在、西ドイツでは、一般に、体育理論からの発展的理論としてスポーツ教育学が理解されている(Röthig,³⁸ pp.285)。しかし、両者の間には何らかの相違が認められるのか。また、認められるとすればそれは何か。名称変更の時期はいつ

なのか。これらの点を明らかにするために、まず、スポーツ教育学という名辞が専門術語として定着していく過程を追ってみる。

1. 専門術語としての定着過程

「スポーツ教育学」(Sportpädagogik)という表現は、すでに1936年、Hirnが“Ursprung und Wesen des Sports”において用いたと言われている(Widmer⁴⁸), pp.30)。また、方法論に限定されていたとはいえ、CoubertinとVivèsにより用いられたそれが徐々にドイツに広まっていったことがBegov⁵) (pp.160)らにより報告されている。^{注1)} さらに、1953年にはAltrock⁴⁾が“Die moderne Sportpädagogik”と題する論文を発表し、1960年にはWesterhaus⁴⁵が“Pädagogik des Sportes”を表している。また、Grupeの“Grundlagen der Sportpädagogik”において単著の書名としては初めてその名辞が採用されたと言われている(Bernett⁸), pp.153)。そして、1969年のノルトライン＝ウェストファーレン州のグルントシュレーにみる教科名の「スポーツ」採用³⁴や、スポーツ科学部に代表されるように、1970年を前後して西ドイツ体育界にみられた“Leibeserziehung”から“Sport”への名称変更以降、SportpädagogikがTheorie der Leibeserziehungに代わる専門術語として広く用いられるようになる(Bernett⁸), pp.153, Meinberg²⁶), pp.7)。しかも現在、スポーツ教育学という名辞は単に西ドイツに留まらず国際的な専門術語として用いられている。^{注2)} しかし、このような専門術語の変更は、より厳密に言えばいつ頃なされたのか。この問いは、スポーツ教育学という学問の成立、発展経過、さらにはその要因を考えていく上で極めて興味深いものである。そして、この問いを考えていく際には、Röhrsの“Allgemeine Erziehungswissenschaft”にみる章タイトルの変更が貴重な示唆を与えてくれる。なぜなら、彼は、その内容にほとんど手を加えることなく改訂版によって章名のみを変更しているからである。以下、彼を例として西ドイツの研究者間にこの術語が定着していく時期について考えていく。

2. Röhrsにみる「スポーツ教育学」の採用

Meuse²⁹⁾ (pp.99)は、Röhrsが“ Allgemeine Erziehungswissenschaft ”において教育科学の独立した一研究領域としてスポーツ教育学を位置づけた点を評価している。^{注3)}しかし、Röhrsは、当初からスポーツ教育学という名称を単独で用いていたのではない。同書は、1, 2版の改訂がなされていない。彼は、章中の記述では兩名辞を用いながらも、章名のみを“ Pädagogik der Leibeserziehung oder Sportpädagogik ”(2版, 1970年)(Röhrs³⁵⁾, p.378)から“ Sportpädagogik ”(3版改訂版, 1973年)(Röhrs³⁶⁾, p.410)へと変更している。^{注4)}この事実は、同著初版出版の1969年から改訂3版出版の1973年にかけて「スポーツ教育学」が専門術語として市民権を得ていったことを裏づけている。それは同時に、「スポーツ教育学」の単独使用へ彼を踏み切らせた状況が当時すでに存在していたことでもある。では、そのような状況とは何であったのか。実は、名称の妥当性に関する彼の記述は、2版と3版改訂版においてほとんど変わっていない。それだけに、両書の相違を明らかにすることにより名称変更の背景を推測する手掛りが期待し得る。そこで、この問題を考えていく際に、まず、彼のスポーツ教育学に対する理解に焦点を当ててみる。

彼は、スポーツ教育学が新しい学問であるとする。彼は、「スポーツ教育学」か「体育教育学」という名称の妥当性を論議する以前に、まず研究対象及び研究方法の問題が論議されねばならない学問としてスポーツ教育学を捉えている。この立場は、両著ともに変わらない(Röhrs³⁵⁾, pp.400,³⁶⁾ pp.432)。しかし、当時大学にはすでに体育理論の講座が設置されていたのである。^{注5)}それにもかかわらずRöhrsがこのように指摘していることは、当時の西ドイツにおいては、果してそれが独立した学問として成立し得るのかを問われていたことを推測させる。それは、逆に言えば、スポーツ教育学の学問としての成立根拠を示すことが当時の研究者達に示されていた重大な課題であったことを意味する。この点は、Röhrs自身の指摘によっても裏づけられる。すなわち彼は、スポーツ現象が研究対象として論議されている一方

で、それ独自の研究領域及び研究方法の開発が遅れていること、しかも大学の講座の増設にもかかわらず、スポーツ教育学あるいは体育教育学を教育科学の一専門分野として位置づける理論的試みが欠けていると述べている。^{注6)}加えて彼は、スポーツ教育学は独自の研究領域及び研究方法をもち得ないとする暗黙の声のあることも指摘している(Röhrs³⁶⁾, pp.410-11)。いずれにせよRöhrsは、学問として成立するか否かという峻烈な問いを投げかけられていた新しい科学としてスポーツ教育学を捉えていたと言える。

ところで、彼はこの新しい科学の研究対象をどのように捉えていたのであろうか。実は彼は、スポーツ教育学独自の研究対象として「体育現実」(die leibeserzieherische Wirklichkeit)を挙げている。彼はそれを次のように説明している。

「体育現実とは、練習、遊戯、競争、トレーニング等において教育的な動機に基づいて構成される領域でその姿を現わす。この観点のもとでは、身体運動は人間の課題としての身体教育及び陶冶である。」(Röhrs³⁶⁾, P.411)

彼は、さらに、スポーツ教育学の研究の関心が、主として、人間の身体性(Leiblichkeit)に向けられると述べている。すなわち彼は、身体性が人間の自己理解に対してもつ意義及び人間の実存構成のなされ方にスポーツ教育学の主たる関心が注がれるのだと考えていた。しかも彼は、身体性という視点が精神科学的な研究のもとではほとんど考慮されてこなかったこと、したがってその不備を補うためにスポーツ教育学を教育科学の専門分科学として位置づけることが必要だとして身体性を中心に据えて研究を進めることの必要性を説いている。そして、スポーツ教育学は身体性の問題に関わることによりスポーツ教授学を超えたより広範な問題領域に関わるのだとしている(Röhrs³⁶⁾, pp.433-34)。

以上の説明から、Röhrsが身体性に焦点を当てて研究を進める学問としてスポーツ教育学を理解していたことが明らかになる。そして、この点に関しても彼の立場は変わっていない。しかし、身体性に焦点を当てたのなら、学問名としてはスポーツ教育学よりも体育教育学の方が適切ではな

いか。このような疑問を示すことは全く容易である。そこで、彼が両名辞の有効性をどのように理解していたのかを続いて示してみる（Röhrs³⁵⁾, pp.400³⁶⁾, pp.432, 434）。

・体育教育学；

Merleau-Pontyにより示された精神、情緒、身体の相互作用に関する研究成果が十分知られていないために、この名称では身体性の表層である肉体的側面（somatische Aspekt）のみに関心が向けられる。

・スポーツ教育学；

現代という時代の典型的な現象としてのスポーツは、身体性が人間の自己理解に果たす役割といった問題を示すよりもむしろ隠してしまう。

Röhrsは、ここでは両名辞の否定的側面のみを指摘している。このことは、Röhrs自身、両名辞のいずれか一方のみが学問名としての単独使用を認めさせるに足る十分な根拠をもつとは考えていないことを意味する。また、両名辞使用の可能性を2版及び3版改訂版双方で彼が認めていること（Röhrs³⁵⁾, pp.401³⁶⁾, pp.433）から学問名決定に対する彼の迷いが窺える。しかし、学問名に対するこのような曖昧な態度にもかかわらず彼は、3版改訂版では、章名としては「体育教育学」を捨て去り「スポーツ教育学」の単独使用に踏み切る。では、彼にこのような決定を下させた要因とは何であったのか。それは、「スポーツ」という語に与えられていた意味の拡大^{注7)}に加え、スポーツ科学の成立、発展に伴う術語上の問題であったと言える。^{注3)}

Röhrsは、スポーツ教育学が専門術語としてもつ利点をスポーツ科学への位置づけという観点から評価している。彼は、スポーツ社会学、スポーツ心理学等と対等の概念としてスポーツ教育学を扱う。この点に関しても両版に相違は認められない（Röhrs³⁵⁾, pp.401³⁶⁾, pp.433）。しかし、3版改訂版においてのみ、プラグマティックな視点からすればスポーツ教育学が妥当であると付記されている（Röhrs³⁶⁾, pp.433）。この記述は、スポーツ科学（Sportwissenschaft）という名称の採用がスポーツ教育学の単独使用を可能にする状況を当時にもたらししていたことを示唆している。

以上、Röhrsにみる「スポーツ教育学」採用の時期に関する考察から、スポーツ教育学という名辞が1969年から1973年にかけて西ドイツの体育界で専門術語としての市民権を得ていったことが明らかになる。しかしWidmerが、Begovらを例にとり、1972年においても尚、SportpädagogikとLeibeserziehungが同義語として使用されていると指摘する（Widmer⁴⁸⁾, pp.185）状況が他方で存在していたことも見過せない。このような状況は、体育理論とスポーツ教育学を全く別の科学として理解することを当然のことながら否定する。しかし、現在では、精神科学的と形容される従来の体育理論からの発展的理論としてスポーツ教育学が理解されている（Röthig³⁸⁾, pp.285）。ここでは、当然、両者の相違が何であるのかが興味をひく。^{注9)}したがって、この名称変更の際にはどのような期待がかけられていたのかを明らかにすることが次の課題となる。以下この問題を(1)「体育」に代わり用いられた「スポーツ」という名称は研究の関心にどのような変化をもたらしたのか、(2)スポーツ教育学と体育理論には研究方法に関してどのような変化が認められるのか、の2点から考えていく。

3. 研究の関心の多様化

1970年を前後した時期、西ドイツでは「体育」では包括しきれない何らかの意味が「スポーツ」という言葉に与えられていたのであろうか。この点を明らかにできれば、スポーツ教育学と体育理論の関心の相違の一端を示すことも可能となる。そしてその一端は、Grupeの次の記述から窺いえる。

○「体育とは、次に－それは当時の用語としては妥当であるのだが－教育学的な基準に基づいて選択され、教育学的な視点が強調された身体運動として理解されている。すなわちそれは、遊戯的形態、ギムナスティック的形態、スポーツ的形態、ツルネンの形態を包括しているのである（この点に関しては、H.Bernett, Grundformen der Leibeserziehung, Schorndorf bei Stuttgart, 1965参照）。しかし、この概念を用いては、また、スポーツのもつ複合した

教育学的な連関構造が十分に再現されないことも明らかであろう。特に、スポーツにとって重要な社会的関係はその例であろう。これは、体育という概念では適切に表現されないのである。」(Grupe¹⁴⁾ P.108)

- 「体育の意味と意義の一部は、人間の身体関係から明らかにされる。また、その一部は、相互作用とコミュニケーションが成立する豊かな可能性を備えた複合した社会的領域(チーム、クラブ、グループ、ピアグループ、組合等)としてのスポーツから生じる。」(Grupe¹⁴⁾, P.108)

これらの記述から、人と人の関わり、相互作用といった意味を含んだ概念としてスポーツが理解されていたことが窺い知れる。Mester²⁸⁾ (pp.74) は、かつて、体育という概念には教科体育の存在根拠を主として身体-情緒-精神統一というモデルから導き出そうとする危険が含まれていると述べた。そこには、社会的存在としてよりもむしろ個としての人間の陶冶を問題とする体育の概念がある。この意味ではGrupeの示すスポーツの概念は、それとは極立った対照をなしている。そして、このようなスポーツは個々人間の相互作用を引き起こす場であるとする理解が、やがては個人の陶冶という限定された視点を越え、個人と個人の関わり、集団と個人、社会化等の視点からスポーツが教育として機能する可能性を明らかにしようとする動きをもたらしたのではないかと考えられる。それは同時に、体育理論からの関心の多様化、関心の質の相違として現われてくる。確かに、研究の関心の多様化とスポーツという言葉に対するこの意味付与は、どちらが後先といった関係では理解できないであろうし、当時の研究者達が直面していた現実を抜きにしてこの問題を語ることも適切ではない。しかし、スポーツ教育学にみる体育理論からの関心の拡大現象を否定することもできない。それは、例えば、次の点からも裏づけられる。すなわち、Trebels⁴⁴⁾ (pp.284)が従来の学校のスポーツ授業においては個々のスポーツ種目が余暇に対してもつ意義がほとんど考慮されてこなかったとした批判にみられるような余暇への対応を求める声の高まり、ADL大会において「スポーツにおける動機づけ」^{注10)} (1970) (ADL¹⁾),

「スポーツにおける社会化」(1973) (ADL²⁾), 「スポーツ-教授と学習」(1976) (ADL³⁾), 「スポーツにおける生徒-生徒にとってのスポーツ」(1983) (Haag¹⁸⁾, P.321)等が一連のテーマとして取りあげられてきた事実である。さらには次のものも付記できる。すなわち、Miethling著「スポーツ授業内での教師と生徒の行動」の出版(1977), 1983年の第9回ADL大会で生徒と教師の人間関係が取り上げられた点をHaag¹⁸⁾ (pp.321)が評価していること、「スポーツ教育学の研究対象決定のために」と題されたスポーツ教育学に関する第1回国際シンポジウム(1975)の報告書で「スポーツ授業における教師と生徒の関係」、「学校という制度内でのスポーツ授業」、「スポーツ授業の目標」がテーマとして示されていること(Beyer⁹⁾, pp.5-6)等々である。ここには、体育の教育的地位確立に向けて努力してきた従来の体育理論とは明らかに質の異なるスポーツ教育学の関心が認められる。

しかし、このような相違をもたらした背景として、教育制度改革への対応といった現実的問題、さらには体育理論の成果そのものに対する批判的検討の影響を見逃すことはできない。確かに体育理論は、身体運動が文化であることを認め(Paschen³²⁾, pp.83), 身体運動の構造分析^{注11)}に基づいて身体運動と個人の陶冶の関わりを積極的に主張してきた。それは、確かに、教科体育定着に貢献した点を評価されている(Meinberg²⁵⁾, pp.11, Kurz²²⁾, pp.27)。しかしその反面、理論と実践の遊離や社会とスポーツの関わりに対する配慮が欠けている(Lange²³⁾, pp.222-23, Denk¹⁰⁾, pp.21), 既成の実践を正統化したにすぎず実践に対し新たな方向づけを与えるに至らなかった(Kurz²²⁾, pp.24)等の批判が示されるに致る。そこでは現実への対応能力を欠く体育理論の姿が指摘され、そのような状況の克服が体育理論に求められていたと考えられる。しかし、そのような問題への対応をいくら求められようとも、それに対処する術を持ちあわせていなければそこからは何の進歩も期待しえない。したがって、体育理論からスポーツ教育学への名称変更に伴う研究の関心の多様化に対応しえる研

究方法が示されていたのかが次の問題になってくる。

4. 研究方法の多様化

スポーツ教育学は、果して、体育理論に比べ多様な研究方法を持ちえたのか。この点を確認するには、研究方法という視点から西ドイツのスポーツ教育学の動向に言及している先行研究に当たることがまず求められる。そして、そのような研究としては、Bernett⁸⁾、Haag¹⁷⁾、Gröβing¹³⁾、Lange²³⁾、Meinberg²⁴⁾ 25) 26)、Röhrs³⁷⁾、Schmitz⁴²⁾を挙げることができる。これらの中には、体育理論(Theorie der Leibeserziehung)、体育教授学(Didaktik der Leibeserziehung)、スポーツ教育学(Sportpädagogik)、スポーツ教授学(Sportdidaktik)といった用語の検討を要するもの、また、教授学に焦点を当てて論を展開しているものもある。しかし、1970年以前のそれを解釈学的、精神科学的方法に基づく理論として特徴づけ、1970年以降のそれを経験的という言葉で特徴づけようとしている点では共通点が認められる。さらに、Gröβing¹³⁾ (pp.32-39)が1970~80年をスポーツ教授学の細分化段階と呼んでいること、また、1970年以降スポーツ教育学という名のもとに多様な理論が主張され多理論主義(Theoriepluralismus)とでもいふべき現象がそこに現れているとMeinberg²⁶⁾ (pp.8)が指摘しているように、1970年以降にスポーツ教育学の理論が多様化している点が指摘されていることも見過せない。しかし、そのような研究方法の多様化はどのような形でなされていたのであろうか。

Paschenが「体育教授学」を出版(1961)して以降、「体育教授学」が学問名として体育の研究者間に普及し出し(Schmitz⁴¹⁾, pp.93)、体育教授学が一般教授学との関わりをもつようになった(Mester²⁷⁾, pp.349)と言われる。このような評価を受けるPaschenは、客観主義と呼ばれる立場から自身の理論を展開している。彼は、精神的な価値が客観化されている身体運動の構造を解釈、分析していくことの必要性を説いている(Paschen³²⁾, pp.15-16)。また、1965年、

「体育の基本形態」として遊戯(Spiel)、ツルネン(Turnen)、スポーツ(Sport)、ギムナスティック(Gymnastik)を示したBernett⁷ (p.7)は、自著の巻頭で、Diltheyを祖とする精神科学的方法に基づいて自身の論を展開すると述べている。また、「身体性の理論」に基づき人間学的立場からスポーツの教育的可能性を論じた点で高い評価を受けるGrupe¹⁴⁾ (Vorwort)は、自身の教授資格論文である“Grundlagen der Sportpädagogik”1版(1969)序文において、それが経験的調査に欠けるとしながらも、体育及びスポーツの人間学的基礎を記述しえる研究方法として記述-現象学的(beschreibend-phänomenologisch)方法に従うと述べている。これら三者の研究方法論上の共通点は、演繹、解釈に求められる。そこには数量的データを用いた検証ないしは帰納的考え方は認められない。実際、1970年以前にみられるVerhaltensweise(Mester, L.)、Aktionsweise(Bernett H.)、Übungsweise(Paschen, K.)、Strukturprinzipien(Schmitz, J.N.)^{注11)}といった考え方は、現象の記述、解釈という方法により特徴づけることができる。

しかし、このような精神科学的ないしは解釈学的な研究方法に対する批判は、1960年代末には明確な形をとって現われてくる。Dahmer, I.とKlafki, W.編¹¹⁾による“Geistwissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche”の出版(1968)及びBrezinkaによる“Von der Pädagogik zur Erziehungswissenschaft”の出版(1971)は、まさに、教育学の世界でそれを特徴づける出来事であった。特にBrezinkaの同著は、西ドイツにおける教育科学研究に新たな方法を提示し、多くの教育学者達に影響を与えたとされている(Wilhelm⁴⁶⁾, pp.47)。そして、教育学にみられる研究方法の変化は、スポーツ教育学に対しても少なからぬ影響を与える。Mager, Bloom, B. und C. Möller, Heimann, Schulz, Robinsohnらの理論に触発されたカリキュラム論に関する論議(Kurz²²⁾, pp.48-50)は、その好例といえる。また、Meinberg²⁶⁾ (pp.30-31)は、従来の体育理論が、教育学と同様に、解釈学的、

現象学的方法を用い経験に対し適切な評価を与えていなかったこと、しかし、研究方法論に対する不満、独自の研究方法を求める要請から1970年代初頭には研究方法に対する認識の変化がもたらされたと述べている。以上に加え、学校制度改革及び専攻学生数の増加といった現実問題への対応を当時の西ドイツの研究者達は求められていたのである（Kurz²²⁾、pp.41-42）。研究の関心の多様化に応じえる研究方法の多様化現象は、このように、解釈学的方法への批判、経験的研究への志向、現実問題への対応、さらに隣接諸科学の研究成果の摂取といった過程を経てもたらされてきたと考えられる。そして、研究方法の多様化現象は、以下の諸事実からも窺い知れる。すなわち、1970年、「カリキュラム」という概念を用いた研究がThiemel, F.やBrodtmann, D.により初めてスポーツの領域で示されて以降、1972年にはカリキュラム論に関する論議が最高潮に達するとされていること（Kurz²²⁾、pp.46-47）。また、1971年にはRetter³³⁾（pp.80）により「帰納的教授学」（induktive Didaktik）が提唱されること。そして、1974年、Widmer⁴⁷⁾の“Sportpädagogik”においてスポーツ教育学の研究手法そのものが問題にされるに至ることである。特にWidmer⁴⁸⁾（pp.164-65）は、同著改訂2版（1977）において「アクション・リサーチ」の問題を新たに一章を設けて論じている。そこでは、経験的方法、解釈学的方法、現象学的方法、弁証法的方法並びに超越論的-批判的方法に加える新たな研究方法としてアクション・リサーチが示されるに至る。そして、1981年にはMeinberg²⁶⁾が、研究方法及び関心の多様化を指摘した上でスポーツ教育学の諸理論を4つのモデル^{注12)}に分類して示している。

さて、以上の考察からスポーツ教育学と体育理論の相違の一端を研究方法及び研究の関心の多様に求めることができよう（尚、1945年以降の理論動向の概略については資料参照）。しかしこのような多様化現象は、現在、スポーツ教育学に対してどのような課題をつきつけているのであろうか。最後に、Meinbergの記述に従いながらこの問題を考えてみたい。

5. 現在の課題

Meinberg²⁶⁾（pp.126-27）は、スポーツ教育学理論の多様化現象が今後ますます進行することを指摘した上で、スポーツ教育学が現在抱えている諸課題を次の3点に要約している。^{注13)}

- (1) 諸科学の理論を応用する可能性を明らかにした上でそれを自身の内に取り入れていくこと及び自身の学問としての構造を明らかにしていくこと。
- (2) 自身の学問史を構築していくこと。
- (3) 理論と実践の関係を明らかにしていくこと。

彼がこれらの課題をどのような意図のもとに示しているのかを理解するには、スポーツ教育学が対応を求められている現実問題及びスポーツ教育学に与えられている期待に対する理解を深めることが必要となる。Meinberg²⁶⁾（pp.14）は、その一例として教員養成の問題^{注14)}を挙げるとともに、スポーツ教育学を行為科学（Handlungswissenschaft）として確立していくことを求めている（Meinberg²⁴⁾）。ここには、スポーツ実践との関わりを求められているスポーツ教育学の姿が認められる。研究の発展が関心の細分化、多様化をもたらし、ややもすればそこで理論と実践の関係が希薄になることもしばしばみられる。しかし、既存の研究方法では対応しえず学際的研究を必要とする問題がもたらされることも十分考えられる。したがって、これらの点も考慮した上で、理論と実践の関係をどのように捉えていくのかを考えていくことが、スポーツ教育学に関わる者に示される重要な課題となってくる。そして、この問題に対処していくためには、自身の学問的性格の究明、学問史の構築、研究の成果を整理、体系化していく視点の提示、学際的研究の進め方をも含めた研究方法論の検討等の問題に答えていくことが求められていると言えよう。

ま と め

以上の考察から、体育理論とスポーツ教育学の関係に関しては、次の点が明らかになったと言える。

- (1) 体育理論（Theorie der Leibeserziehung）に代わりスポーツ教育学（Sportpädagogik）

が専門術語として定着しだすのは、1969年から1973年にかけてである。また、この名称変更の背景にはスポーツ科学との関連が認められる。

- (2) 解釈学的な研究方法に基づいて個人の陶冶に目を向けていた体育理論に比べスポーツ教育学は、研究の関心及び方法に多様化現象を示している。
- (3) したがってそれは、現在、学問としての体系化、研究方法論の展開、学際的研究の進め方の検討、学問史の構築、理論と実践の関係解明等の課題を抱えている。

しかし、体育理論からスポーツ教育学へという名称変更に伴ってもたらされた現象を研究の関心及び方法の多様化と特徴づけたところでスポーツ教育学の全体像は何ら明らかにされてはいない。したがって、今後は、以上の課題克服に向けての努力とともにスポーツ教育学の全体像を明らかにする視点を提示していくことが求められる。

注

注1) Coubertinは、1919にスイスのLa Concorde社とフランスのCres社から“Pedagogie sportive”を出版している。これは、ドイツ語、マジャール語、スペイン語に翻訳された。また同著は、1972年に復刻版が出版されている(清水⁴³⁾、pp.141)。

注2) この点は、スポーツ科学の学問領域として、現在、スポーツ教育学が右図のよに位置づけられていることから明らかであろう²⁰⁾(p.5)。しかし、“Sportpädagogik”を専門術語として使用することに対する疑問は現在も尚消え去ってはいない。この点は、Schmitz⁴²⁾(pp.67)がスポーツ教育学は術語としと確立されたものではないと述べていることから明らかである。また、スポーツ教育学が、ややもすれば、西ドイツ特有の名辞と理解されている面も見逃せない。それは、アメリカでは、Physical Educationが支配的でありSportpädagogikが独立した理論領域としては認められていないとHaag¹⁷⁾(pp.28-29)が述べてみたり、Grupeら(Röthig³⁹⁾、pp.351-52)が西ドイツ以外の国でSportpädagogikに比較しえる名辞を見出すことが

Theorie- feld	Internationale Organisation	Internationale Zeitschrift
Sport- medizin	Federation International de Medicine Sportive (FIMS)	Journal of Sports Medicine and Physi- cal Fitness
Sport- biomechanik	International Society for Biomechanics	Journal of Bio- mechanics
Sport- psychologie	International Society of Sport Psychology (ISSP)	International Journal of Sport Psychology
Sport- pädagogik	International Council on Health, Physical Education, and Recreation (ICHPER) / Federation International d'Education Physique (FIEP)	International Journal of Physical Education / Journal of Teaching in Physi- cal Education / Bulletin of FIEP
Sport- soziologie	Committee for the Sociology of Sport	International Review of Sport Sociology
Sport- geschichte	International Association for the History of Physi- cal Education and Sport (HISPA)	Stadion
Sport- philosophie	Philosophic Society for the Study of Sport	Journal of the Philosophy of Sport

困難であると述べ、Sportpädagogikの英訳をTheory of physical educationとしていることにも窺える。またRöhre³⁷⁾(pp.108)がアングロサクソンのスポーツ教育学の解釈としてPhysical Educationを取りあげていることも印象的である。これらは、国際的な共通理解のもとに専門術語を決定することの困難さを示していると言える。

注3) Meusel²⁹⁾(pp.99)は、1973年の3版改訂版においてRöhreが一般教育科学の専門科学として次のものを示したとしている。

- 教育学史(Gesichte der Pädagogik)。
- 学校教育学(Schulpädagogik)。
- 教授学と方法学(Didaktik und Methodik)。
- 社会教育学(Sozialpädagogik)。
- 養護教育学(Heilpädagogik)。
- 経済教育学(Wirtschaftspädagogik)。
- スポーツ教育学(Sportpädagogik)。
- 比較教育科学(Vergleichende Erziehungswissenschaft)。

注4) 両名辞のいずれを専門術語として用いるのかという問題は、Röhre自身、1973年においても尚、完全な解決を得ていない。この点は、彼自身の次の記述から読みとれる。

「例えば著者は、自著“ Allgemeine Erziehungswissenschaft ”の1, 2版(1969, 1971)では Pädagogik der Leibeserziehung か Sportpädagogik かという二者択一的名称を用いている。しかし、同3版(1973, 410)では Sportpädagogik という概念を初めて優先させた。本著では、Sportpädagogik が教育科学内で独自の研究方向をもつことが示され、その根拠が与えられている。」(Röhrs³⁷⁾, P.11) (傍点岡出)

尚, “ Allgemeine Erziehungswissenschaft ”の2版は1970年出版である(Röhrs³⁵⁾)。Röhrs³⁷⁾ (pp. 12) は, Pädagogik der Leibeserziehung und Leibesübung, Theorie der Leibeserziehung に代わり Sportpädagogik が採用される背景を次の5点から指摘している。(1)諸社会科学の影響。(2)Turnideologieからの転向。(3)身心二元論からの転向。(4)スポーツ科学の発展。(5)研究対象としてのスポーツのもつ利点。

注5) Begov⁵⁾ (pp.159) は、ヨーロッパ諸国の大学においては、体育に対する学問的評価が低いことを指摘する。すなわち、体育は大学に統合されず、別個に独立した研究所が設置されたこと。それにもかかわらず、博士号や教授資格論文が認められないというように、学問としての承認がなされなかったこと。また、それらの研究所の卒業生の給与が他の領域の卒業生に比べ低かったことを指摘している。そして、現在では、それら研究所の地位が向上し、体育の領域にも教授職が確立されてきたと述べている。Begovは、教授職の確立が西ドイツでは1966年以降であると述べている。またPaschen³²⁾ (pp.16) は、1926年に体育研究所 (Institute für Leibesübungen) が大学に設置されたがそれは研究機関というよりも教員養成機関としての性格が強かったこと、さらに体育が大学での学問的地位を確立していくのは1965年、フランクフルト大学でそれが博士学位科目及び教授資格取得科目として承認されて以降であると述べている。

注6) 1960年代中頃においても尚、体育理論は、その学問的地位を確固としたものとするために努力していた。Bernett⁷⁾ (pp. 3) が、1965年においても尚、体育が実践的、方法論的方向を求め、体育を教育学の中に位置づけるために必要な理論的根拠を欠いていると述べていることは、この点を裏づけてくれる。

注7) 例えば、Bernettが「体育の基本形態」の一つとして「スポーツ」を示していた時、それは明らかにツルネン、遊戯等と区別され、競争、達成という観点から特徴づけられた競技形態をとるスポーツ種目という限定的意味で理解されていた。しかし、第二の道、国民スポーツ運動、トリム運動等がもたらすスポーツ概念の拡大は、そのような限定的意味においてのみ「スポーツ」を使用することを困難にしていたと Kurz²²⁾ (pp.62-63) は指摘している。

注8) スポーツ科学の発展とは何か。スポーツ教育学との関連でそれを述べるならば、ADLによる一連の大会報告書にみられる理論的成果や Sporthochschule Köln の設立 (1970)、Bundesinstitut für Sportwissenschaft の設立 (1970)、また雑誌「Sportwissenschaft」の発刊 (1971) 等が挙げられよう (Röhrs³⁷⁾, pp.14, pp.16-18)。尚、Sporthochschule Köln は、ディームを校長としてすでに1947年に設立されている。しかし、それが正規の大学に認定されるのは1970年である (岸野²¹⁾, P.187, P.233)。Röhrsは、この点で1970年を Sporthochschule Köln の設立年と述べていると考えられる。

注9) Meinberg²⁵⁾ (pp.11) は、体育理論の特徴として(1)教科体育定着への貢献、(2)教育理論と人間学との結びつき、(3)現象の理解と解釈という方法論的限定性、(4)視点の狭さ、(5)メタ理論の不在、の5点を挙げている。その上で彼は、体育理論とスポーツ教育学の関係を次のように述べている。「体育理論に認めらるる狭小な構想は超えられねばならない。この意図こそがまさに現代のスポーツ教育学の起動相であり、その中心的、根源的動因で

である。それは、スポーツ教育学が1970年以降に全く新たに登場したのではないことを意味している。スポーツ教育学は、体育理論では解決されなかった、あるいはそこで見過されてきた問題をその中心的問題とする。このことは、現代のスポーツ教育学が特定の思想を継続して成立していること、すなわち、歴史をもつことを意味している。」(Meinberg²⁵⁾, P.11)

注11) 体育理論が示した身体運動の構造分析 (Schmitz⁴⁰⁾, P.36)

注10) Lange²³⁾ (pp.220) は、第5回ADL大会(1970)において「動機づけ」(Motivation)がテーマとして取りあげられたことに対し、経験的に方向づけられた心理学からもたらされるような問題がADL大会において初めて論議の対象とされたと評価している。第5回ADL大会においてこのように経験的な研究方法への志向、現実的問題への対応の発芽が認められることは、体育理論からスポーツ教育学への発展経過を考えていく上で極めて興味深い。

	Bestimmungs- grundlage	Einteilungs- aspekt	Gliederung		
J. N. SCHMITZ	Lebensphänomene und deren Dispositionen	Strukturprin- zipien der Leibesübungen	BEWEGUNG Gestalten	SPIEL Spielen	WETTEIFER Leisten
L. MESTER	Verhalten des Kin- des im Vollzug von Leibesübungen	Verhaltens- weise	Tanzen (Üben) ¹	Spielen (Üben)	Leisten (Üben)
O. HANEBUTH	Urphänomene der Kultur: Spiel, Kampf, Arbeit, Kunst	Tätigkeits- elemente	Gestalten	Spielen	Kämpfen Leisten
K. PASCHEN	Sinnbereiche der „elementaren Selbstbewegung“	Übungsweise	Tänzerische Übungsweise ²	Spielhafte Übungsweise	Sportliche Übungsweise ³
H. BERNETT	Historische Gebilde der Leibesübungen	Aktionsweise	Gestalten (Gymnastik) Beherrschen (Turnen) ⁴	Spielen (Spiel)	Kämpfen (Sport)
A. SEYBOLD- BRUNNHUBER	Wesensmerkmale der Leibeserziehung	Dispositionen	Bewegung Handeln	Spiel Freude	Leisten
O. NEUMANN ^{5, 6}	Lebensimmanente Objektivierungen und Gehalte ihrer Aktualisierung	Bildende Gehalte		Spiel	Wettkampf Leistung

注12) Meinbergの示すスポーツ教育学の4つの
モデル(岡出³⁾¹⁾)

	研究方法(礎地となる理論)	研究対象(関心)	有効性 限界
人間学的スポーツ教育学	社会学の人間学 心理学の人間学 教育学の人間学	人間像, 運動, 発達, 児童期, 少年期, 肉体的性及び身体性 行為規範の妥当性	行為規範の批判的考察
コミュニカティブ スポーツ教育学	社会へと関心を向けた 批判的行為理論 シンボリック相互作用主義 言語哲学の諸理論 コミュニケーション, 相互作用等の諸概念の 利用	スポーツ活動にみられ るコミュニケーション の理論化 言語, 運動, 遊戯的行 為, スポーツ的行為の 関係 教育, 社会化, スポー ツ授業, 社会学習の関 係	基本概念の厳密な規定 が必要 方法論の未熟さ スポーツ活動にみられ るコミュニケーション の理論化
科学的スポーツ教育学	批判的・合理主義的な 科学理論 観察 質問 実験 テスト	教育過程をより適切に 制御する情報 基礎調査の結果の有効 性の検証 新たな教育方法等と結 びついた目標の実現可 能性	教育的に重要なスポー ツ現実をより厳密に測 定しようとするスポー ツ教育学のモデル構築 に貢献 部分的理論に留まり実 践に対し無力
システム論的 スポーツ教育学	システムの変化をも説 明しえる機能構造論 サイバネティックス 二種類の概念の使用 教育学的に重要な 概念 教育学の基本概念	競技スポーツ スポーツシステムの自 律性を保証する要因の 解明 スポーツ教育学個々の 概念の明確化 スポーツ教育学の関与 する知識の複雑性を制 御する	スポーツ教育学の関与 する諸事情の複雑性を 制御しえる スポーツの一般理論及 び個別理論の抱える諸 問題を規定していく手 掛りを与える スポーツ教育学の全領 域をカバーしきれない

注13) Meinberg²⁵⁾ (pp.12-14) は、1980年には、スポーツ教育学理論の課題として次の5点を示している。

- (1) 研究対象を明らかにしていくこと。
- (2) 学問論及び研究方法論の問題を取り扱うこと。
- (3) 諸科学とスポーツ教育学理論の関係を扱うこと。
- (4) 体育理論をも含めたスポーツ教育学の学問史を構築していくこと。
- (5) スポーツ教育学を「行為科学」(action science) としての構築していくこと。

注14) Haag¹⁸⁾ (pp.321) は、ADL大会の今後の課題としてスポーツ教師の「政治的行為能力」に関する研究を進めていくことをあげている。この「政治的行為能力」とは、DSBが1975年にスポーツ教師養成モデルで示したスポーツ教師に求められる資質の一つである。尚、DSB¹²⁾ (pp.40-41) は、スポーツ教師に次の4つの行為ができる資質を求めている。

- (1) 教育的行為 (Pädagogisches Handeln)
- (2) スポーツ的行為 (Sportliches Handeln)
- (3) 学問的行為 (Wissenschaftliches Handeln)
- (4) 政治的行為 (Politisches Handeln)

〈 資 料 〉

1945年以降の西ドイツにみるスポーツ教育学の動向

年	事 実	理 論 の 動 向 , 関 心	目 標 観	教 材
1945	ドイツ降伏			
1947	ベルリンで教科体育が規則的に実施され出す(多くの都市では1949年より)	体育の空白期間		
1950	DSBの結成			
1953	ADL結成 ニーダーザクセン州「スポーツ教育」の指導計画	(改築教育学への回帰) (発達心理学への依存)		
1954	Paschen, K. "Bewegungs- erziehung"			(Gymnastik) (Tanz) (Leichtathletik) (Swimmen) (Spiel)
1956	学校体育促進勧告		全体教育の一部としての体育の寄与	↓ 60年代半ばまで大きな変化はない。
1957	ヘッセン州一般陶冶学校用陶冶計画	Mesterの理論の反映	健康と人格への寄与	教材体系はDiem Eに依頼
1958	第1回4DL大会「遊戯」	テーマ決定に際し考慮する問題として余暇対策が指摘されている。		
1959	第4回教育大学研究集会		(1) Körperbildung (2) Bewegungs- bildung (3) Anwendung : Anwendung は Leistung Spiel 等の構造原理と 関連して理解されている。	
1960	ノルドライン=ヴェストファーレン州指導要領	体育教授学論議の契機 身体運動の構造原理の解明及びそれらと陶冶実現の可能性の関連を明らかにすることを求める ↓ (教科の必要性の根拠付け 身体運動の行い方のカテゴリー化を試みる。 ↓ 既成実践の正統化に貢献。しかし、新たな実践の方向を示すに至っていない。また、その成果が指導計画に反映されるに至っていない。	生物学的視点、 社会的行為能力 精神の発達 (1950~70年)	
1961	Paschen, K. "Didaktik der Leibeserziehung" 第2回ADL大会「競争」 Mester, L. "Freizeitpädagogik"			
1962	Mester, L. Grundfragen der Leibeserziehung" Roth, H. "Die realistische Wendung in der pädagogischen Forschung" Berrett, H. "Der Kannon der Leibeserziehung"	→ 教授学において人間学的(anthropozentrisch)方向と客観的(objektivistisch)方向の2面を考慮することの必要を指摘する。	健康と教育、 陶冶を直接関連づけることが、 困難であることから、 身体運動が健康に対してもつ意義は二義的に扱われるようになってゆく	

年	事 実	理 論 の 動 向 , 関 心	目 標 観	教 材
1962	Koch K による "Schriftenreihe zur Praxis der Leibes- erziehung und des Sports" の 発刊	→ Didaktik と Methodik の分離		
1964	第3回 A D L 大会「達成」			
1965	Bernett H "Grundformen der Leibeserziehung"			
1966	ドイツスポーツ憲章	余暇が体育教授学理論の重要な テーマとされ出す。		
1967	第4回 A D L 大会「構成」 Schmitz, J. N. "Grundstruktur des didaktischen Feldes" Robins hn, S. B., "Bildungsreform als Rivision des Curriculums"			
1968	メキシコオリンピック Dahmer, I. μ. Klafki, W., "Geistwissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche"	→ スポーツの大衆化及び競技 力向上への要請 ↓ スポーツ概念の拡大 (専攻学生数の 増加, 学校制 度改革) ↓ (現実問題に対応 できない体育教 授学理論) (機能陶冶主義へ 批判発達心理学 への批判)		
1969	Grupe, O. "Grundlagen der Sportpädagogik" Röhrs, H., "Allgemeine Erziehungs- wissenschaft"	→ 体育理論 からスポ ーツ教育 学への名 称変更		
	Blankertz, H., "Theorien und Modelle der Didaktik"	Mager, R. F., Bloom, B. und C. Möller, Heimann, P., Schulz, W らの理論に基づく 論議 ↓ カリキュラム論議の始まり, 教科 の構造を社会との関わりに基づき 理解しようとする。	余暇への対応	
1970	第5回 A D L 大会「スポーツ における動機づけ」 Hecker, G., "Sportdidaktik" 連邦スポーツ科学研究所活 動開始	Turnen の教材価値をめぐる論議	教科固有の目標 (die fachimmanenten Aufgaben) と一般的 教育目標を区別する	

年	事 実	理 論 の 動 向 , 関 心	目 標 観	教 材
1971	Brezinka. W., "Von der Pädagogik zur Erziehungswissenschaft", Sportwissenschaft にみるカ リキュラム論特集 Retter, H., "Zur gegerwärtigen Situation der Didaktik der Leibeserziehung"	→ 帰納的教授学の提唱		
1972	学校スポーツ促進勧告 Dietrich, K., "Zum Problem der Lehrplanentscheidung"	→ (Bildungsziele に代わり) (Erziehungsziele を採用) → 学校スポーツが考慮すべき領域と して Freizeit, Gesundheit, Sport, Personalisation, Sozialisation を 挙げる	→ (子どもと青少年の欲求と権 利, 学習と知 識の強調, スポーツ参加 を促す諸能力 習得)	スポーツ種目の 教材への大幅な 導入及び教材の スポーツ化
1973	第6回ADL大会「スポー ツの中での社会化」 ノルドライン＝ヴェストフ ァーレン州中等段階Ⅰ,Ⅱ 指導計画案		→ スポーツ授業の 一般的目標とス ポーツ授業固有 の学習目標を分 ける	
1974	Widmer, K, "Sportpädagogik"	→ 研究方法論		
1975	ADL 第1回スポーツ教育学 国際シンポジウム	→ スポーツ教育学の研究对象として の(1)スポーツ授業における教師と 生徒の関係, (2)学校という制度内 でのスポーツ授業, (3)スポーツ授 業の目標という三本柱を示唆		
1976	第7回ADL大会「スポーツ 教授と学習」			
1977	Widmer, K., "Sportpädagogik" 2 版改訂版	→ アクション・リサーチ		
1978	Chachy, K., "Sportspiel und Sozialisation"			
1979	第8回ADL大会 「スポーツ実践における理 論」			
1980	Rumpf, von H., "Schulen der Körperlosigkeit"	→ 身体の再発見, 経験すべき対象 として身体が問題とされ出す		
1981	Meinberg, E., "Sportpäda- gogik"	→ スポーツ教育学の4モデルを提示 スポーツ教育諸理論の体系化		
1983	第9回ADL大会 「スポーツの中での生徒に とってのスポーツ」			

引用・参考文献

1. ADL (Hrsg.), Motivation in Sport, Hofmann: Schorndorf, 1971
2. ADL (Hrsg.), Sozialisation im Sport, Hofmann : Schorndorf, 1974
3. ADL (Hrsg.), Sport Lehren and Lernen, Hof mann : Schorndorf, 1976
4. Altrock, H., "Die moderne Sportpädagogik", in : Nöcker, J. (Hrsg.), Sportarzt-Tagung 13. bis 15. Dez. 1953 in Leibzig, Volk und Gesundheit : Berlin, 1954, pp. 18-24
5. Begov, F. u. Kurz, D., "The Pedagogics of Sport in West European Countries", in : Grupe, O. (Hrsg.), The Scientific View of Sport, Springer : New York, 1972, pp. 159-68
6. Bernett, H., "Der Kannon der Leibeserziehung", in : Leibeserziehung, 11-9 : 282-90, 1962
7. Bernett, H., Grundformen der Leibeserziehung, 3. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1975
8. Bernett, H., "Zur Konstruktion der Sportdidaktik und zu ihrer Stellenswert im Fachstudium", in : Sportwissenschaft, 5-2 : 147-61, 1975
9. Beyer, E. u. Röthig, P. (Red.), Beiträge zur Gegenstandsbestimmung der Sportpädagogik, Hofmann : Schorndorf, 1976
10. Denk, H., "Einführung in das Kongreßthema", in : ADL (Hrsg.), Sport Lehren und Lernen, Hofmann : Schorndorf, 1976, pp. 19-24
11. Dahmer, I. u. Klafki, W. (Hrsg.), Geistwissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche, Beltz : Weinheim, 1968
12. DSB (Hrsg.), Sportlehrerausbildung, 4. unvera. Aufl., Hugo Haßmüller : Frankfurt/M., 1979
13. Größing, S., Einführung in die Sportdidaktik, 3. wesentliche verä. u. verb. Aufl., Limepert : Frankfurt/M., 1981
14. Grupe, O., Grudlageu der Sportpädagogik, 2., unvera. Aufl., Hofmann: Schorndorf, 1975
15. Grupe, O., "Bewegung, Spiel und Sport in der Erziehug-Ziele und Aufgaben", in : Grupe, O. (Hrsg.), Einführung in die Theorie der Leibeserziehung und des Sports, 5. völlig neu bearb. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1980, pp. 216-43
16. Grupe, O., "Anthropologische Grundlagen der Sportpädagogik", in : sportunterricht, 33-1 : 5-17, 1984
17. Haag, H., "Zur inhaltlichen Konzipierung der Sportpädagogik als Aspekt der Sportwissenschaft", in : Andrecs, H. u. Redl, S. (Hrsg.), Forschen-Lehren-Handeln, Österreichischer Bundesverlag für Unterricht, Wissenschaft und Kunst : Wien, 1976, pp. 23-33
18. Haag, H., "Im Brennpunkt", in : sportunterricht, 32-9 : 321, 1983
19. Hecker, G. u. Trebels, A. H., Sportdidaktik, Henn : Ratingen, 1970
20. Internationale Zeitschrift für Sportpädagogik, "Vorwort", in : Internationale Zeitschrift für Sportpädagogik, 20-3 : 5, 1983
21. 岸野雄三 (編著), 近代体育スポーツ年表, 大修館書店, 1973
22. Kurz, D., Elemente des Schulsports, 2. unvera. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1979
23. Lange, J., "Zur gegenwärtigen Situation der Sportdidaktik", in : Sportwissenschaft, 5-3/4 : 217-50, 1975
24. Meinberg, E., Erziehungswissenschaft und Sportpädagogik, Hans Richarz : Sankt Augustin, 1979
25. Meinberg, E., "Aspects of a theory of sport pedagogy", in : Internationale Zeitschrift für Sportpädagogik, 17-2 : 10-15, 1980
26. Meinberg, E., Sportpädagogik, Kohlhammer: Stuttgart, 1981
27. Mester, L., "Aktuelle Fragen im Span-

- nungsfeld der Didaktik”, in : Leibeserziehung, 12-11 : 374-53, 1963
28. Mester, L., Grundlagen der Leibeserziehung, 3. erg. u. überarb. Aufl., Westermann : Braunschweig, 1969
 29. Meusel, H., Einführung in die Sportpädagogik, Fink : München, 1976
 30. Miethling, W. D., Lehrer-und Schülerverhalten im Sportunterricht, Limpert : Bad Homburg, 1977
 31. 岡出美則, 第3回日本スポーツ教育学会発表資料, 1983. 11. 27
 32. Pascheen, K., Didaktik der Leibeserziehung in Schule und Verein, 4. Aufl., Limpert : Frankfurt/M., 1972
 33. Retter, H., “Zur gegenwärtigen Situation der Didaktik der Leibeserziehung”, in : Leibeserziehung, 20-3 : 77-82, 1971
 34. Richtlinien und Lehrpläne für Grundschule-Schulversuche in Nordrhein-Westfalen-, A. Henn : Wuppental, 1969
 35. Röhrs, H., Allgemeine Erziehungswissenschaft, Beltz : Weinheim, 1970
 36. Röhrs, H., Allgemeine Erziehungswissenschaft, 3. erg. u. überarb. Aufl., Beltz : Weinheim, 1973
 37. Röhrs, H., Sportpädagogik und Sportwirklichkeit, Limpert : Bad Homburg, 1982
 38. Röthig, P. (Hrsg.), Sportwissenschaftliches Lexikon, 4. unvera. Aufl. Hofmann : Schorndorf, 1977
 39. Röthig, P. (Hrsg.) Sportwissenschaftliches Lexikon, 5. neu bearb. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1983
 40. Schmitz, J. N., Grundstruktur des didaktischen Feldes, 2. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1970
 41. Schmitz, J. N., Fachdidaktische Analysen und Grundlagen, 3. umgarb. u. erw. Aufl. Hofmann : Schorndorf, 1972
 42. Schmitz, J. N., Allgemeine Grundlagen der Sportpädagogik, Hofmann : Schorndorf, 1978/
 - 79
 43. 清水重勇, 「19世紀フランスのSport概念の変遷について」, 岸野雄三教授退官記念論集刊行会 (編), 岸野雄三教授退官記念論集刊行会, 1982, pp.141-63
 44. Trebels, A., “Zuwendungsmotive zum Sportunterricht und zeitgenössische fachdidaktische Modelle”, in : ADL (Hrsg.), Motivation im Sport, Hofmann : Schorndorf, 1971, pp.277-86
 45. Westerhaus, H., “Pädagogik des Sportes”, in : Studium Generale, 13-2 : 79-84, 1960
 46. Wilhelm, W., 平野正久, 柴田昌治訳, 「現代西ドイツにおける教育史研究の危機」, 教育学研究, 45-3 : 43-56, 1978
 47. Widmer, K., Sportpädagogik, Hofmann : Schorndorf, 1974
 48. Widmer, K., Sportpädagogik, 2. erw. u. verb. Aufl., Hofmann : Schorndorf, 1977